た。同日の『十三松堂日記』に

〔上略〕午後四時より東京會館に開かれたる高村光雲翁喜壽祝宴に赴く　頗る盛會にて來會者四百五十人に達せり　此日高村氏より美術學校木彫科標本費の中へ壹千圓　美術協會玄關修築費の中へ壹千圓　東京府美術館增築費の中へ壹千圓　寄付の申出ありたり

と記されている。この日は正木直彦、彫刻科教官らの外に横山大観、川合玉堂、和田英作、小室翠雲その他美術界の面々が大勢出席し、大宴会となったので、翌日の各紙が写真入りで大きく採り上げた。『東京毎夕新聞』は次のように報じている。

〔上略〕貞丈の講談谷風や、天洋の奇術や結城孫三郎の操人形十種香などの餘興の中に、光雲翁は一族四人と共に山本瑞雲氏に案内されてニコ〳〵として設けの席につく、彼地からも此地からも翁を取卷いて賀辭を述べる、餘興が濟むと愈々祝賀會に移る、司會は内藤伸氏、賀辭は平山成信男と正木直彦氏、その賀辭の中には簡單ながら翁が五十餘年美術界に致した功勞がよく盡くされてゐる、それが終ると平尾賛平氏が恭しく記念品目錄を贈呈する、それは此日參會した人々の自署の帖と、即興の詩歌書畫の帖、それから老の身を安らかにといふ意味の夜具一襲ね、繪畫一幀である、翁のあの福相に一層の嬉しさを湛へつゝ感極つて謝辭を述べた、かうして式は七時十分頃終り食堂も開かれ春の一夜を樂しく語り合ひつゝ九時頃散會した、翁はこの賀宴に感激して觀音像千體を彫刻する一方我美術界のため三千圓を寄付することになつたが、千圓は美術學校の木彫科の研究費に、千圓は日本美術協會の迎賓館建築費に、あとの千圓は東京府美術館の增築費に充てる旨正木美術學校長から發表された　尙大阪の木彫家から光雲翁に立派な記念品が贈られた〔下略〕

④　学生思想問題およびプロレタリア美術運動

昭和初期の本校生の間に現れた顕著な傾向として、一般に学生思想問題と呼ばれる左翼思想活動とそれに関連したプロレタリア美術運動への参加ということがある。

学生思想問題というのは、「大正末から昭和初期にかけて学生層を中心とする左翼的、社会主義的思想および運動を主として官側における治安維持の観点から当時総括した言葉」（『日本近代教育史事典』昭和四十六年、平凡社）である。第一次世界大戦は大正七年に終結したが、いわゆる戦争景気によって日本の大企業が飛躍的発展を遂げた一方で、物価が著しく騰貴して庶民生活の困窮が甚しくなり、全国各地で米騒動が起こるなどし、社会問題が激増した。大正期の後半はいわゆる大正デモクラシーの気運とともに国内体制の矛盾を背景とした社会主義運動が著しく興隆した時代であるが、前の戦争景気は一転して恐慌の到来を招き、経済界の不況が続くなかで庶民の生活不安は深刻なものとなって行った。こうしたなかで大正十二年九月一日には関東大震災が起こり、東京とその近辺は大混乱に陥ったのであった。

このような社会情勢に呼応して各大学、専門学校、高等学校の学生の間に民主主義運動が急速に発展し、大正十一年十一月に至って日本学生社会科学連合会（略称学連）が結成された。学連はロシア革命、国内的諸矛盾を要因として社会主義的、共産主義的傾向を強めて行き、労働団体や社会主義各派との提携によるその活動は全国的な広がりを見せたので、政府はこれを危険視して対応措置を検討し始め、ここに学生思想問題が大きくクローズアップされて来たのである。

大正十二年十一月、震災の直後に政府は社会的混乱を鎮めるという理由で国民精神作興に関する詔書を出したが、それは体制を揺るがすばかりとなっていた社会主義運動、思想を弾圧して天皇制の精神的基礎を固めるという目的も持っていた。以後の文教政策はこの詔書の強い作用を受け、敗戦に至るまでの教育の方向づけがここになされたのである。さらに同十四年には治安維持法が制定され、学生の思想取締りも一段と厳しくなった。また、文部省は学生の左翼運動対策として勅語の徹底、国体観念の涵養、国民精神作興に関する種々の方策を打ち出した。昭和六年には学生思想問題調査委員会が設置され、その答申に基づき翌七年八月には「わが国体、国民精神の原理を闡明し、国民文化を発揮し、外来思想を批判し、マルキシズムに対抗するに足る理論体系の建設を目的とする有力なる研究機関」としての国民精神文化研究所が設立された。こうした対策が進むなかで、教育界から左翼思想活動、民主主義的活動が駆逐されて行ったのである。

さて、この学生思想問題が本校ではどのようなかたちで現われたかということであるが、先ず記しておかねばならないのは、本校は特殊な性格の学校であるため一般から特別視され、生徒もそれに甘んじて社会の動きに無関心であるという傾向が強かったものの、この学生思想問題においては決して例外的存在ではなく、活発な活動が展開されたことである。それまでの歴史を振り返って見ると、本校関係者のなかで多少とも社会主義運動と関わった人に、『平民新聞』の挿絵を描いた平福百穂や大杉栄と共著で『漫画漫文』を出版するなどした望月桂、大正十年蒼空邦画会に労働者を描いた絵を出品したりした小林源太郎、小林とともに第一作家同盟（ＤＳＤ）に加わって階級闘争を主題とする作品を発表した水島爾保布その他があるが、彼らのそうした活動は卒業後のことであった。それが昭和初期になると既述のような学生の左翼活動の活発化とプロレタリア美術運動の興隆に合わせて在校生の間でも活動が盛んになったのである。

当時の美術界は、時代は遡るが明治四十年代からの印象派、後期印象派の移植と二科会の誕生、大震災頃を境とするフォービズムの擡頭、大正十五年の里見勝蔵、佐伯祐三、小島善太郎、前田寛治、木下孝則らによる一九三〇年協会の発足、同会を母体とする昭和五年の独立美術協会の結成へというように新しい動きが次々と起こり、それによって官展を中心とする画壇にも徐々に新陳代謝が行われた。一方、大正期末には世界的なアヴァンギャルドの芸術運動が日本へも波及し、さまざまなイズムが登場し、それらは震災後の政治的、社会的転換期における若い世代に歓迎され、急進的破壊的制作活動が行われ、前衛運動が展開された。プロレタリア美術運動は

こうした前衛運動のなかから成長して来る。普門暁らの未来派美術協会と二科会の急進派中川紀元、古賀春江、横山潤之助、中原実、矢部友衛、吉田謙吉、吉村二郎らの結成したアクション、および村山知義らのマヴォが団結して、二科会に対抗する三科会の展覧会を開いたのは大正十三年のことであった。これが分裂してそのなかのマルキシズム系作家のみが造型を結成し、昭和二年にこれは造型美術家協会と改称。従来のアナーキズム的要素を除去してネオ・レアリズムの立場を顕示し、プロレタリアートの革命的意志と情熱を造型芸術に反映させることを目ざした。なお、大正十四年には日本プロレタリア文芸連盟が発足し、そのアナーキスト分子を除名してプロレタリア芸術連盟ができ、これと前衛芸術家連盟が合併して昭和三年に全日本無産者芸術連盟（ナップ）が成立。その美術部は造型美術家連盟よりも政治的、闘争的で、漫画やポスターを主とするアジプロ的美術に主力を注いでいた。そして、昭和三年秋にはナップ美術部と造型美術家協会が合同で第一回プロレタリア美術大展覧会を府美術館で開催し、さらにこの二つの団体は翌四年に合併して日本美術家同盟（P・P（ヤップ））となり、これが昭和九年の解散まで華々しい活動を展開する。中央委員は矢部友衛、岡本唐貴、橋浦泰雄、川越篤、大月源二、大平章、吉原義彦、小林源太郎、早川文夫、寄本司麟、鈴木賢二（書記長）らで、このうち矢部、吉田、吉村、岡本、鈴木は本校の卒業生ないし中退生であった。

在校生の間に以上のようなプロレタリア美術運動の影響がはっきりしたかたちで現われて来たのは、後出の故須山計一氏の遺稿によれば昭和二年の頃からで、同三年の第一回プロレタリア美術大展覧会以降、同展覧会には本校生が多く出品し、その間に『美術研究』の発行（433頁参照）をはじめとしてさまざまな活動が行われ、同七年の学校当局による弾圧（609頁参照）を経て活動が急速に下火になるというのが大体の筋道であると言えよう。

一九二七――三七年代のプロレタリア美術と美校内における影響

〔須山計一氏遺稿〕

一九二七年（昭和二年）三月、卒業制作展に大月源二「新しい生活！」（八〇号大）がでた。作者は「近代プロレタリアートこそ生活革新の指導部隊である」ことを暗示し象徴しようとした。（大月記）

同期に永田一脩がいて、のちに前衛美術家同盟に参加した。なお大月は同年夏プロレタリア芸術連盟、美術部に加盟した。つづいて機関誌「プロレタリア芸術」に「プロレタリア美術の開花へ」等執筆。（大月は一九七一、三、一八、札幌の病院で死去。六十五歳）

一九二七年（昭和二年）、須山計一（西洋画科三年生）日本プロレタリア文芸連盟美術部に加盟、同組織より「無産者新聞」漫画部へ派遣され、柳瀬正夢のもとで、連載漫画「アヂ太プロ吉」をかく。また「戦旗」などに漫画を執筆した。なお鈴木賢二（彫刻科三年生）もプロレタリア文芸連盟に加盟した。

一九二八年（昭和三年）五月、西洋画科四年生を中心に社会科学研究会、五月会が組織された。小黒武雄、岡田秀雄、岡野福太

郎らが中心で、須山計一、小松益喜、岩崎勝平、松岡信治、中村茂雄（四年、西洋画科生）、鈴木賢二（同、彫刻科）、海老原一郎（同、建築科）らが参加、三年、西洋画科の佐藤敬、中村鉄、二年、西洋画の岩松淳〔惇〕〔八島太郎〕、木下幹一、黒田頼綱、一年、西洋画の春日清彦らも加った。

五月会ではマルクス「フォーエルバッハ・テーゼ」、エンゲルス「空想から科学へ」などテキストとしての研究が行なわれた。

一九二八年一一月、第一回プロレタリア美術大展覧会が東京府美術館で開かれ、東京美校在校生および卒業生のつぎの出品があった。

Ⓐ在校生

新聞を読む労働者　他六点　岩松　淳〔惇〕

肖像　他一点　支　健二（佐藤　敬）

九月の思い出　他二点　鈴木　賢二

トーマを排撃せよ　他一点　宇野　圭（須山計一）

Ⓑ卒業生

職場帰り　矢部　友衛

「プラウダ」を持つ蔵原惟人　永田　一脩

デモの素描A、B、C、他二点　大月　源二

一九二九年（昭和四年）、この年、学内での軍事教練反対闘争が盛んになり、鈴木賢二、岩松淳〔惇〕などが、軍教反対のビラまきなどやり、両名とも、月謝怠納〔滞〕など理由に退校を命ぜられた。

須山計一、日本プロレタリア文芸連盟主催の上野街頭の似顔市場で上野署に検挙され、一夜で釈放さる。読売新聞にそのニュースがでたため、校務課〔教〕に呼びだされ鈴川信一生徒部長〔主事〕の審問をうく。

一九二九年一二月、第二回プロレタリア美術展が府美術館で開かる。美校関係の出品者はつぎの通り。

Ⓐ在校生

地下室の集合　大林　長男（木下幹一）

戦争　他二点　須山　計一

よし今度は俺だ！　小出　啓三（春日清彦）

Ⓑ退校生

人形づくり　鈴木　賢二

違う違う合法なんだ　岩松　淳〔惇〕

Ⓒ卒業生

労働葬　矢部　友衛

告別　大月　源二

一九三〇年（昭和五年）三月、卒業制作展に「労働者」（須山計一）、「闘う市電労働者」（岡田秀雄）、「軍閥と娼婦」（岡野福太郎）など西洋画科生約一〇名の社会主義的作品がでたが、岡野福太郎の作品は学校当局によって美校卒展初めて撤回を命ぜられ、三月卒業が不可能になり、温健な風景作品を改めて提出、同年六月、一名のみで卒業した。この事件のため、翌年から卒業制作にあたっては、事前にそのテーマなど提出することになった。

なお、在学中の須山計一は左記の漫画、文章などかいた。

「戦旗」漫画欄　昭和四年――五年

「漫画とプロレタリアート」（「プロレタリア芸術教程」第三集、昭和五年四月）「漫画と漫画家」（「アルト」昭和四年二月）

一九三〇年三月、日本プロレタリア美術家同盟第二回全国大会で鈴木賢二は書記長に、須山計一は中央委員に選出された。

一九三〇年九月、「アトリエ」プロレタリア美術の研究と批判特集に左の美校関係の執筆がでる。

プロレタリア美術概論　鈴木　賢二

世界プロレタリア美術の発生と発展　大林長男（木下幹一）

日本プロレタリア美術史　矢部　友衛

世界プロレタリア美術の現状　須山　計一

プロレタリア美術の煽動宣伝的役割について　大月　源二

一九三〇年一一月、第三回プロ展、上野公園日本美術協会で開催、「音」（矢部友衛）、「白色テロルに抗しろ」（大月源二）、「アヂ太プロ吉世界漫遊記」（須山計一）、「職場を引きあげる」（岩松淳〔樗〕）など出品さる。

一九三一年（昭和六年）二月、「新興芸術研究」（日本プロレタリア芸術の近況特集）に左記がでる。

プロレタリア美術運動の現段階　須山　計一

プロレタリア美術の新らしき形態　佐藤　敬

一九三一年一一月、第四回プロ展、上野公園、自治会館で開催、「プロレタリア青年」（大月源二）、「凱歌」（矢部友衛）、「アムステルダムの手先共」（須山計一）等出品。

一九三二年（昭和七年）春、大月源二ら検挙さる。

一九三二年（昭和七年）一一月、第五回プロ展、上野自治会館に開催。「村」「祖国のために」（須山計一）、「失業救済」（岩松淳〔樗〕）、「土木労働者胸像」他彫刻二点（佐田四郎こと入江弘）など出品。

一九三三年（昭和八年）五月、須山計一、プロレタリア美術家同盟書記長となる。一一月、須山検挙され、翌年八月起訴、徴役二年、執行猶予三年判決。

一九三四年（昭和九年）三月、日本プロレタリア美術家同盟解散。

一九三七年（昭和十一、二年頃）

西洋画科〔油画科〕三年生、杉本博、佐田勝、彫刻科同、佐藤忠良ら、学内の民主化を要求、進歩的講師をよんで研究会をおこなう。杉本は検挙され、仙台刑務所等で受刑した。なお、杉本、遠藤健郎らのデザミ展が銀座紀伊国屋画廊で三回ひらかれ、杉本は「労働者像」などかいた。

⑤　校友会の近代芸術研究部

既述のように昭和三年はプロレタリア美術運動が最高潮に達した年であるが、同年春に校友会文芸部の中に近代芸術研究部が組織され、活発な活動が始まった。同部の趣旨は、従来のような作品そのものを分析的に研究する研究法から一歩進んで芸術を気候風土、民族性、国民性、社会との関連の上で把え、科学的かつ総合的に研究を進め、芸術の依って立つ基礎をつきとめようという点にあった（岡田秀雄「近代芸術研究部」『東京美術学校校友会月報』第二十七巻第三号）。首脳部は岡田秀雄、木下幹一、木村郁太郎、小松益喜、佐藤